

岐阜同朋 反省せうぼう

- 同朋会運動とは何か? ~藤井慈等先生に聞く~ Part1
- 岐阜別院掲示伝導中高生の出遇った言葉・中高生と出会う言葉
- 「同朋の会」ノススメ (岐阜市加納・雲端寺)
- My Book

2022.03 126



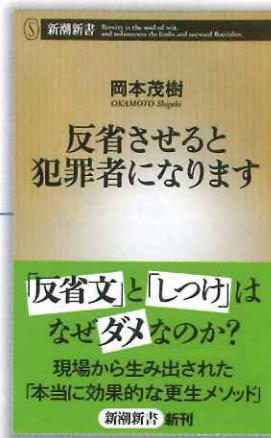
岐阜別院掲示伝導(鷺谷中・高等学校書道部の皆さん/書)

岐阜市大門町

MyBook

反省させると犯罪者になります

岡本茂樹 (著) 新潮新書 ¥863 (Kindle版有り)



社会一般では、何かしらの「悪事」または「失敗」をした時に反省を求め、また求められるでしょう。

しかしそれは抑圧と爆発(抑圧の発散)を生む早計な判断だといえます。手順をあまりに端折っていると言えます。

その結果が犯罪やイジメや精神障害で現れてしまう。本当に必要な対応は、それに至るまでの経緯をたどり、自分の心の痛みに気づかせる事、これが反省の始まりなのだと言います。

具体的には、犯罪を起こした時の気持ちと自分が何をしたのかを認識してもらう事。次いで自分が迷惑に思った事、被害を受けたと思ったときの状況や気

事なのだそうです。つまり心にわだかまっている思いを全て吐き出す事で初めて自分の痛みが気づき、自分の痛みが気づく事ができたからこゝろ、はじめて他者の思いが引き当てられるようになる。ここに至ってはじめて能動的に本当の反省ができるという事です。

最もダメな対応は安易に反省文を書かせる事。それも被害者や被害者の関係者の気持ちを考えさせる事なのだといえます。

これをさせる事により加害者は上手な切り抜け方をおぼえるだけであるし、読む側も反省文の評価をするだけに終わってしまふ。つまりその出来事(犯罪などの)の本質も見ず、解決を放棄していく行為になっている。なので反省させても同じような事を繰り返すのです。

持ちを思い出してもらう事。そしてそれらを手紙(誰も読まない)として書きだす

重版出来 お待たせしました!
ご好評をいただいた「中陰カード」が重版になりました!

中陰カード

初七日から七七日までの中陰法要の意義を丁寧にたずねるとともに、それぞれのご和讃もわかりやく解説。

1セット(初七日から七七日、初月忌の8枚入り) 100円!
(ご注文は5セット500円より承ります。)

中陰法要のご法話の
手がかりに最適!

私自身、気づきの多い一冊でした。抑圧と爆発、これは当たり前にある事。自分をないがしろにした、あるいはないがしろにされた事に気づけたならば。こまめにその時の気分を紙に書き出して自分を見失わない様にしたいと思った。安易に反省に至らないように日々内省をする事が大事だと感じました。

編集後記

新型コロナウイルスの感染状況によって、この2、3年の間にお寺業界では一つの言葉が大流行しました。それは「内勤め」という言葉です。「今年の報恩講は内勤め致します」など最近ではほぼ日常語にもなりました。

いつも助音や法話を頼まれていた方たちへの依頼や仏華の注文などが激減したそうです。一言で「内勤め」と言っても、中身は様々で、身内の法中だけでほぼ同じ勤行をしているお寺から、儀式や荘厳をかなり簡略化したお寺まであります。

法座を中止するのは社会的価値観として当然かも知れませんが、あえて法座を開かれる住職方にもそれなりの理由があります。

「コロナウイルス感染拡大という社会の中で、あえて、仏事としての法座を開かれるには、それなりの意味を持って開催されます。また、「コロナですから中止にします。」と言われてしまえば何も言い返せなくなってしまうのも事実です。

この2年間であらゆる場所で「不急」「不要」の判断の境界線の曖昧さが露わになってきました。一時的だと思っていた変化がなんとなく続いていく、いつの間にかそれらが普通になり戻らなくなっていくのかもしれない。

これから先、浄土真宗の寺院の仏事がどうなっていくのか。改めて私たち一人一人が課題として考えていく必要があるのではないのでしょうか。

(篠)

同朋会運動とは何か？

Part 1

藤井慈等先生に聞く



す。真宗の教えにあらためて学び直すような営みが運動の基礎にあつて、特伝

宗門では、近年行財政改革の必要性が叫ばれ議論が始まっています。2022年は同朋会運動が始まって60年に当たりります。私たちは「同朋会運動」としていろいろな取り組みをしてきたが、この運動がどういった背景をもつて始まり、何を願ひとしてきたのか、根本的なことがはつきりしていません。今一度このことを確かめるために、運動の初期から携わっておられた三重県慶法寺住職の藤井慈等さんにお話をうかがいました。(聞き手：五辻 元／高田 信)

先生はどのように同朋会運動に関わっておられたのでしょうか。

藤井慈等先生(以後敬称略) 1962年に「真宗同朋会運動は純粹なる信仰運動である」という一つのテーゼが掲げられて同朋会運動が始まりましたが、僕が宗務所に入ったのは1968年で同朋会運動第2次5カ年計画の中でした。

第2次5カ年計画では教区教化委員会が生まれて運動の主体を地方に移譲するということがありました。地方に教化委員会が生まれると、教団問題を契機にして学習会、問法会がたくさん生まれてきました。

また、1969年に難波別院

輪番差別事件が起こり、靖国神社法案の問題で東西両本願寺が反対声明を出すということが始まりました。そして同じ年には開申事件もおきています。そういう危機感に立って真宗の教えに学ぶということが大きな地方の仕事になっていったんじゃないでしょうか。

それを背景にして、同朋会運動15周年の後に、本山でも宮城頭先生等が学習会の講師となられて共学研修会とか伝道研究所などが行われてきました。第1次5カ年計画のときには蓬茨祖運先生が教団の所長になられて伝道研修会を始められたんで

いてどう思われますか。(五辻)

藤井 念仏の教えに出遇った喜びとか感動が自ら場を生み出すので、場を作ったから人が生まれるというのは、発想が逆ではないでしょうか。聞かずにおれんということになってくると、出かけるすかね。住職や僧侶が問法会に出かける、研修会に出かける。そこから推進養成講座や特伝などの研修会に関わっていくエネルギーが出てきたということがあって、今言われている寺院活性化ということとはちよつと違うニュアンスを感じます。けれども、行政としては場作り、同時に人を生み出すという施策が求められるし、そういう運動の歴史であつたと思います。

藤井慈等) 研修部長が、奉仕団の解散式でよく「住職がまず念仏者になることです」というお話をされていたことを思い出します。(五辻)

藤井 教団問題のさなかに安田理深先生に出遇いました。そのときに「君もやがて寺に帰らんならんけども、住職一代の間一人念仏者が生まれるかどうか。そのためにまず君が念仏者にならないならん」という言葉をいただいたんです。同時に「住職の教学というのがいるんだ」と仰った。僕にはそれが強烈で、今までずっとそこが立ち戻る原点になっていきます。その一点にだけ立ち返る。住職50年してきたんですけども、どこまでが念仏者なのかというそれは証明がなければならんでしょう。本当に一人の念仏者が生まれたかと問われるとなかなか答えられない。また、宮城頭先生が仰っていたのは、寺に住まいするものが一番念仏を軽蔑しているんじゃないかということでした。念仏に自信がなくなってくると手作りの信心になつてきますね。今日は、本山としても社会的課題にアプローチするということがありますが、基づくところは南無阿弥陀仏。そ

の講師とか同朋会館の教導とかになられていくということが、信仰運動の大きな原動力になっていったと思います。この間、宗務所と教学研究所とに身をおき、80年代はお寺と組、教区での活動になりました。研修部長を引き受けましたのは1995年で8年間在籍しました。輪番の差別事件や教団問題があつて危機感からいろいろな問法会などが始まっていったというお話がありました。その危機感とは、教えが失われていくことに対するものなのか、それとも本山の在り方に対するものなのか、どういったものなのでしょう。(高田) 藤井 危機感の持ち方はそれぞれによつて違うかもしれません。同朋会運動が発足する前段階、戦前に、曾我量深先生の「歎

異抄聴記」そして「信巻聴記」が出版され、安居の講義があつて、曾我先生の教学に多くの方が触れられることになりました。念仏者の先生方の大きな働きがあつて、曾我教学というようなものから伝研などが生まれてきたというように思います。70年代になつて安田理深先生や金子大栄先生方が亡くなつていかれ、同朋会運動の大きな支柱がなくなり、大事な信心の問題ということがぶれてきたのではないのでしょうか。そういうものが危機ということでは、危機なんですよ。60年代、「同朋教団」ということがテーマになつてきましたが、それを名告ることの課題がはつきりしていなかったという危機感が、あらためて宗祖親鸞の教えに学び直すという歩み呼び起こしたと思います。今は、人口が減少していつて宗門や寺院の存続が危ういと。そういう危機感の中で「寺院活性化」とか「元氣が出るお寺」という言葉が出てきて「場の創造」が課題であつていわれています。「この」とい

こを離れると、我々の主観で運動を作り出すということになつてくると思われます。それも危機と言えは危機ですね。同朋の会が生まれるよりも念仏者が生まれるということが願ひとしてあつて、そのこと一つが「純粹なる信仰運動」であるといえるのではないのでしょうか。どうしてもお寺の活性化とかお寺に同朋の会を作るということをお朋会運動として考えてしまいますが。

安田先生自身が「一人では聞法できないからあなた方に参加してもらおう」ということを、「大地の会」とか「金蔵寺夏期講習会」で折に触れて仰った。そういう意味では、本当に問法をした、念仏の教えに会いたいということが同朋会運動の原点なんじゃないかと思えます。念仏の人との出遇いに育てられてきたのだと思えます。今はその原点がぶれているのではないのでしょうか。「次の世代に教えや真宗の生活が伝わっていない」というような状況の中

で、今あらためて問われるのは、「寺に住んでいる住職が念仏者になる、住職・僧侶が真宗門徒になる運動が同朋会運動だ」と。これは和田稠先生の言葉ですが、親鸞聖人が法然上人の門徒であつたように、僕らが親鸞聖人の門徒になる。親鸞聖人から諸先生方の教学を通して、大きい求道の精神に触れて、僕らは救われたんです。だから私たちに、先生の言葉を通してその担わられた課題を伝えるという責任があると思つています。(以下次号)

※1 難波別院輪番差別事件

1969(昭和44)年、難波別院輪番が職場の女性に対して、「交際している男性は部落民だから交際しない方がいい」と差別発言をしていたことが発覚した。これに対し「部落解放同盟」から糾弾が行われ、教団の差別性が問われることとなった。

※2 開申(かしの事件)

1969(昭和44)年4月24日、大谷光暢氏は突然記者会見し、「管長職を新門長男光紹氏に譲る」と発表した。親鸞の血を引く大谷家の当主は、法統の継承者、法主であると同時に本山・東本願寺住職であり、さらに真宗大谷派の管長をも兼ねる。これは「三位一体」といわれ、明治以来の不文律であつた。内局との協議を経ず「宗憲」に定められた手続きを経ず行われた開申(通達)は、この後さまざまな教団問題を引き起こすことになる。

中高生の出遇った言葉 中高生と出遇う言葉

近年、お寺の掲示板が注目されはじめています。「お前も死ぬぞ」という言葉がインターネット「輝け！お寺の掲示板大賞」2020年度の大賞を受賞したのも記憶に新しいところですが。生活の中で、ふと目に入った言葉は、ときに自分を励まし、ときに深く自分を問うてくる。そんなことがあるのです。



岐阜別院
掲示伝道

岐阜地区教化センター研修部会では、コロナ禍で人が集まるのが困難で研修会や聞法会が行えない状況でも行える教化の一つとして、掲示板を活用していくことが話し合われました。岐阜別院にも、境内と山門南側にそれぞれ掲示板があるので、これまで十分に活用しきれていませんでした。

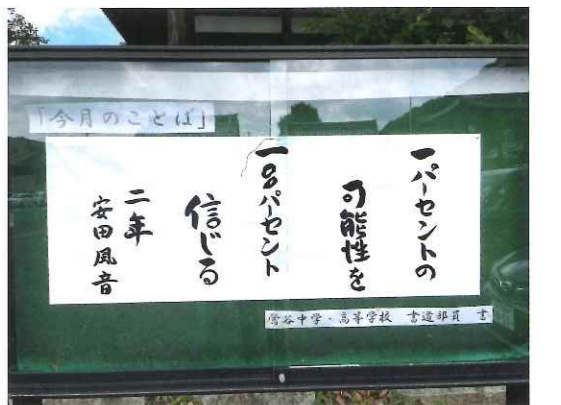
特に注目したのは、山門南側の通りにある掲示板です。岐阜別院の東側には鶯谷中・高等学校があり登下校の際、生徒さんの目にも留まりやすいので、若い人たちにも響く言葉を掲示しようということになりました。これに先立って第15組教化委員会が地元郡上の高校生に書を依頼し、組内寺院に手書きのポスターを配布するという取り組みが行われており、こういった事例も参考にさせていただきました。鶯谷中・高等学校書道部に岐阜別院の掲示板の法語を書いていた

だくようお願いしました。担当の先生からは、このコロナ禍で、

休校になったり、授業がリモートになったり、友達と会うこともできず、これまで部活動も十分にできないまま発表の場もなくなっていたそうです。こちらからの呼びかけに賛同いただき、早速取り組みが始まりました。



法語については研修部会で自作、あるいは書籍等からの引用で、中高生とも共感できるような言葉を選定し、リストとして書道部にお渡ししました。併せて、部員の皆さんからも、生活の中で響いた言葉を書いてほしいと依頼しました。



2021年9月から二か月くらいの期間で、まず、書いていただいたものは書道部員自作の言葉でした。



中高生の言葉からは、将来に向かって勉強や部活動に励む意気込みが伺えます。



そして、2回目以降は、こちらからお渡ししたリストの中から選んでいただきました。



本堂前



山門前

【ロクデナシ】THE BLUEHEARTS

これらを「今月の言葉」と題し境内2か所に掲示しました。特に通学路沿いの掲示板は、枠に合わせ、横幅約170cmの用紙に書いていただいたので、通りからは大変目を引くものとなりました。時折、生徒さんも足を止めて言葉に見入っている姿や、親御さんも気にかけて見に来られている様子が伺えます。

彼ら彼女らは日々、勉強や部活動に力を尽くしています。しかし、その中で躓くこともあるかもしれません。親や友達との



本堂前

関係がうまくいかなくなることもあるでしょう。大人であっても同じ問題を抱えています。そういった悩みを抱えるときにも、自分の在り方を見つめ、見捨てない心があることを伝えたいというのが掲示伝道の願いです。

研修部会では、今後、書道部の皆さんとの懇談の場をもちたいと考えています。中高生が目指していることや思いを聞かせていただき、仏さまの願いや浄土真宗として示されているものを



山門前

通して大切なことを確かめ合いたいと思います。言葉を通して響きあう関係ができることを願い、取り組みを継続していきたいと考えています。



「同朋の会」ノススメ

(取材日・21.05.15)



旧岐阜教区で実施した「同朋の会」に関するアンケート結果によると、会の講師は寺の住職が務めている場合がほとんどです。（岐阜同朋121号参照）今回は、講師を招いて行っている「雲端寺同朋の会」をご紹介します。



内仏の荘厳講座」などの内容で40人以上の方が集まられていたようですが、現在は平均14〜5人くらいの方が参加されています。長年、会を続ける中で、テキストを用いた連続講座の形式で行っていたこともありましたが、一度欠席すると話が分からなくなってしまうので、回ごとにテーマを設定して行う現在の形となりました。

提示し問題提起をされ、話し合いとなります。

今回伺った日は、緊急事態宣言解除後、何か月ぶりの再開となり、新型コロナウイルス感染症対策を行ったうえでの開催となりました。テーマは「嘘本音と建前」。はじめに講師が作成されたA4裏表一枚の資料を用いて問題提起をされ、その後、司会を兼ね座談を進行されていました。「サラリーマン生活をしているときは、建前ばかりの生活でした」など、生活のうえでの様々な声が聞かれ、嘘ということにどのような問題があるのかを確かめる話し合いとなりました。

雲端寺は、岐阜市加納、JR岐阜駅の南側にある街中のお寺です。もともととお寺には22日の太子講とそれを引き継いだ法話会がありました。2003年度に組で実施した推進養成講座がきっかけとなり現在の同朋の会が始まりました。同朋の会は年に7回、土曜日あるいは平日の午後2時から行われています。最初のころは「お

講師を担当するのは、往明寺(郡上市高鷲町)住職の仲谷俊昭さんです。現在の形式では、仲谷さんが資料を

雲端寺同朋会 2021
アフリカリズム(付)で「にんげんってなんだろう」と着書の題をたいてみませんか？

みんな違った立場なのに みんな同じ立場に 立っていらして思っている	おれい おれい おれい	誰かをうつと いきなり立つ正義感があるのは なぜだろう
自分と他人を比べてはならない 自分と他人を比べてはならない 自分と他人を比べてはならない	おれい おれい おれい	誰かをうつと いきなり立つ正義感があるのは なぜだろう



仲谷さんが座談を進行される際には、「自分はこう思うが、皆さんはどうですか?」と具体的な形で問いかけをされているそうです。あらかじめ答えをもつて理解させようということではなく、参加者の方から聞いてみたいことを投げかけることによつて、互いに発見があるのだと語られます。また、場を大切にするため、無理に語ることは強制せず、一定の距離を保つて接しておられるということでした。

住職の藤井晃さんも同様に自分自身のことを語りながら、疑問を参加者に投げかけました。休憩時間は特に設けず、座談のなかでお菓子を食べることも、場を和ませる一助となっていたようです。



参加者の年齢層は50代から80代で幅広く、会を楽しみに毎回参加しておられる方もおられるようです。中には門前に貼ってあるお知らせを見て参加されたという雲端寺のご門徒でない方もあり、どんな人でも参加できる間口の広さを感じました。

住職さんは「新たな推進員の誕生がなく、次の世代にどうつなげていくかが課題。1年に2〜3人を誘って参加してもらうのを当面の目標にしている」話をされない方も

